

モミの木

ハンス・クリスチャン・アンデルセン Hans Christian Andersen

矢崎源九郎訳

青空文庫

町はずれの森の中に、かわいいモミの木が一本、立っていました。そこはとてもすてきな場所で、お日さまもよくあたり、空気もじゆうぶんにありました。まわりには、もつと大きな仲間の、モミの木やマツの木が、たくさん立っていました。

けれども、小さなモミの木は、ただもう、大きくなりたい、大きくなりたいと思つて、じりじりしていました。そんなわけで、暖かなお日さまのことや、すがすがしい空気のことなんか、考えでもみなかつたのです。農家の子供たちが、野イチゴやキイチゴをつみにきて、そのへんを歩きまわつては、おしゃべりをして、そんなことは気にもとめませんでした。子供たちは、イチゴをか

ごにいつぱいつんだり、野イチゴをわらにさしたりすると、よく、小さなモミの木のそばにすわって、言いました。

「ねえ、なんてちっちゃくて、かわいいんだろう！」

ところが、モミの木にしてみれば、そんなことは聞きたくもなかったのです。

つぎの年になると、モミの木は、長い芽だけ、一つ大きくなりました。またそのつぎの年になると、もつと長い芽だけ、また一つ大きくなりました。モミの木からは、毎年毎年新しい芽がでて、のびていきますから、その節ふしの数をかぞえれば、その木が幾いくつになつたかわかるのです。

「ああ、ぼくも、ほかの木とおんなじように、大きかったらなあ

！』と、小さなモミの木はため息をつきました。「そうだったら、ぼくは、枝えだをうんとまわりにひろげて、てっぺんから広い世界をながめることができるんだ！ 鳥も、ぼくの枝のあいだに巣すをつくるだろうなあ！ 風が吹ふいてくりや、ぼくだって、ほかの木とおんなじように、じょうひんにうなづくこともできるんだがなあ！』

明るいお日さまの光も、鳥も、頭の上を朝に晩に流れてゆく赤い雲も、モミの木の心を、すこしもよろこばせてはくれませんでした。

そのうちに、冬になりました。あたりいちめんに、キラキラかがやくまつ白な雪が降りつもりました。すると、ウサギが何度も

とび出してきて、この小さな木の上をとびこえて行きました。――
――ああ、まったくいやになっちゃう！――

でも、冬が二度すぎて、三度めの冬になると、この木もずいぶん大きくなりました。ですから、ウサギは、そのまわりを、まわって行かなければならなくなりました。ああ、大きくなる！ 大きくなつて、年をとるんだ！ 世の中に、これほどすてきなことはありやあしない、と、モミの木は思いました。

秋には、いつもきこりがやってきて、いちばん大きな木を二、三本、切り倒たおしました。これは、毎年毎年くり返されることです。いまではすっかり大きくなつた、この若いモミの木は、それを見ると、ぶるぶるつとふるえました。なにしろ、大きいりっぱな木

が、メリメリポキツと、恐ろしい音おそをたてて、地べたにたおれるんですからね。それから、枝が切り落されると、まるはだかになつてしまつて、ひよろ長く見えしました。こうなれば、もうもとの形なんか、ほとんどわからないくらいです。やがて、車にのせられて、それから、ウマにひかれて、森の外へ運ばれていつてしまいました。

いったい、どこへ行くのでしょうか？　そして、これからどうなるのでしょうか？

春になつて、ツバメやコウノトリが飛んでくると、モミの木はたずねてみました。「あの木がみんな、どこへ連れていかれたか、あなたがた、知りませんか？　途とちゆう中で会いませんでしたか？」

ツバメは、なにも知りませんでした。しかし、コウノトリは、なにか考えこんでいるようでした。そして、やがてうなずきながら、こう言いました。「そうだ。きつと、こうだろうよ。ぼくがエジプトから飛んできたとき、新しい船にたくさん出会ったんだよ。船には、りっぱな帆柱ほぼしらがあつたけど、きつと、それがそうだよ。モミのおいもしていたしね。みんな、高く高くそびえていたよ！　これが、きみに教えられることさ！」

「ああ、海をこえていけるくらい、ぼくも大きかったらなあ！　その海つてのは、いったいどんなものですか？　どんなものに似ているんですか？」

「そいつを説明したら、とつても長くなっちまうよ」コウノ

トリはこう言うと、むこうへ行つてしまいました。

「おまえの若さを楽しみなさい」と、お日さまがキラキラかがやきながら言いました。「おまえの若々しい成長を、しあわせに思いなさい。おまえの中にある若い命を楽しみなさい」

すると、風はモミの木にキスをして、露つゆはその上に涙なみだをこぼしました。けれども、モミの木には、なんのことかさっぱりわかりませんでした。

クリスマスになると、ずいぶん若い木が、幾いくほん本も切りたおされました。その中には、ほんとに小さな若い木もあって、このモミの木ほど大きくもなければ、年もそんなにちがわないものもありました。ところで、モミの木は、ちつとも落着いてはい

られません。やっぱり、どこかへ行きたくて、行きたくてならなかったのです。切られた若い木々は、どれもこれも、よりによって、美しい木ばかりでした。そして、いつも枝をつけられたまま、車にのせられました。そして、馬にひかれて、森の外へ運ばれていってしまったのです。

「みんなどこへ行くんだろう？」と、モミの木はたずねました。

「ぼくより大きくもないのになあ。それに、ぼくよりずっと小さいのだった。どうして、みんな枝をつけたままなんだろう？ どこへ行くんだろう？」

「ぼくたちは知ってるよ。ぼくたちは知ってるよ」と、スズメたちがさえずりました。「ぼくたちはね、むこうの町で、窓からの

ぞいたんだよ。みんなどこへ連れていかれたか、ぼくたちは知ってるよ！ とつてもとつてもりっぱに、きれいになっていたよ。

ぼくたち、窓からのぞいてみたんだもの。あつたかい部屋のまんなかに植えられて、そりやあ、きれいなものでかざられていてね、金色にぬつたりんごや、ハチ蜜みつのはいったお菓子かしや、おもちゃや、それから、何百つていうろうそくで、きれいにかざられていたよ！

「で、それから——？」と、モミの木は、枝という枝をふるわせ、聞きました。「それから？ ねえ、それからどうなったの？」

「それから先は、ぼくたち見なかったよ。だけど、くらべるものもないくらい、とつてもすてきだったよ！」

「ぼくも、そういうすばらしい道を進んでいくようになるだろうか？」と、モミの木は、うれしそうにさげびました。「海の上を行くよりも、このほうがずっといい！ ああ、たまらないや！

クリスマスだったらいいのになあ！ もうぼくだって、こんなに大きくなって、去年連れて行かれた木ぐらいになっっているんだもの！——ああ、早く車の上ののりたいなあ！ あったかい部屋の
中で、きれいに、りっぱになれたらなあ！

だけど、それから——？ うん、それからは、もつといいことが、もつときれいなものがくるんだ。そうでなきや、ぼくを、そんなにきれいかぎってなんかくれやしないだろう。そうだ、もつと大きなことが、もつとすばらしいことがくるにちがいない——

—！ だけど、何だろう？ ああ、苦しい！ とてもたまらない！ この気持、自分でもよくわからないや」

「こうしてわたしがいるのを、よろこびなさい！」と、空気とお日さまが言いました。「この広い広いところで、おまえの若さを楽しみなさい！」

しかし、モミの木は、すこしもよろこびませんでした。でも、ずんずん大きくなっていきました。冬も夏も、みどりの色をしていました。こいみどりの色をして、立っていたのです。人々はモミの木を見ると、「こりやあ、きれいな木だ！」と、言いました。クリスマス木のころになると、どの木よりもまっさきに切りたおされました。おのが、からだのしんまで、深くくいりました。

モミの木は、うめき声をあげて、地べたにたおれました。からだ
がいたくていたくて、気が遠くなりそうでした。とても、しあわ
せなどとは思えません。かえって、生れ故郷をはなれ、大きくな
ったこの場所からわかれてゆくのが、悲しくなりました。もうこ
れつきり、大好きな、なつかしいお友だちや、まわりの小さなや
ぶや、花にも会うことができないんだ、そればかりか、きつとも
う鳥にも会えないんだろう、と、モミの木は思いました。こうし
て、旅に出かけるということは、楽しいものではありませんでし
た。

モミの木は、どこかの中庭について、ほかの木といっしょに車
から下ろおされたとき、はじめて、われにかえりました。ちようと

そのとき、そばで人の声がしました。「これがりっぱだ！　ほかのは、いららないよ」

そこへ制服を着た 召使めしつかいが、ふたりやってきて、モミの木を、大きな美しい広間の中へ運びこみました。まわりのかべには、肖像ようぞうが画がかかっていました。タイル張りの、大きなストーブのそばには、ライオンのふたのついている、大きな中国の花瓶かびんがありました。それから、ゆり椅子いすや、絹張りのソファや、大きなテーブルもありました。テーブルの上には、絵本やおもちやがいっぱいありました。それは、百ターレルの百倍ぐらいもするものでした。——すくなくとも、子供たちは、そう言っていました。

モミの木は、砂のつまった、大きなたるの中に立てられました。

でも、それがたるであるとは、だれの目にも見えませんでした。というのには、そのたるのまわりには、みどり色の布がかけられていましたし、おまけに、色とりどりの、大きなじゆうたんの上に置かれていましたから。

ああ、モミの木は、うれしくて、どんなにふるえたことでしょう！ それにしても、これから、いったい、どうなるのでしょうか？

召使とお嬢さんじょうがきて、モミの木をきれいにかざつてくれました。枝の上には、色紙を切りぬいてこしらえた、小さな網あみの袋ふくろがかけられました。見れば、どの袋にも、あまいお菓子がつまっています。それから、金色にぬったリングや、クルミがさげられます。

したが、それらは、まるで、そこになっているようでした。そして、赤や青や白の小さなろうそくが、百以上も、枝のあいだにしつかりとつけられました。ほんとの人間にそっくりのお人形が——モミの木は、いままでに、こんなものを見たことがありませんでした——みどりの枝のあいだでゆれていました。木のいちばんてっぺんには、きんぱく金箔をつけた、大きな星が一つ、かざられました。それはほんとうに美しく、まったくくらべものもないくらいりっぱなものでした。

「今夜ね」と、みんなは言いました。「今夜は、光りかがやくよ！」

「ああ！」と、モミの木は思いました。「早く、夜になればいい

なあ！ 早く、ろうそくに火がつけばいいなあ！ でも、それから、どうなるんだろう？ 森から、ほかの木がここへやってきて、ぼくを見てくれるだろうか？ スズメが、窓ガラスのところへとんでくるだろうか？ ぼくは、しっかりとここに生はえていて、冬も夏も、きれいにかざられているんだろうか？」

まったく、モミの木が、こんなふうと思うのも、むりはありません。しかし、あんまりいろいろなことを、あこがれて考えるものですか、木の皮が、ひどく痛みはじめました。木の皮が痛むというのは、わたしたち人間にとって頭がずきずきするのと同じことです。木にしてみれば、じつにつらいことなのです。

やがて、ろうそくに火がともされました。なんというかがやき

でしよう！　なんという美しきでしょう！　モミの木は、うれしくてうれしくて、枝という枝をふるわせました。すると、ろうそくの一本にみどりの葉がさわって、火がついてしまいました。そのため、すっかりこげてしまいました。

「あら、たいへん！」と、お嬢さんたちはさげんで、いそいで火を消しました。

モミの木は、もう二度とからだをふるわせたりはしませんでした。ああ、まったくおそろしいことでした！　それに、自分のからだのおかざりが、なにかなくなりはしないかと、それはそれは心配でした。そして、あたりがあんまり明るいので、すっかりぼんやりしてしまいました。――

と、そのとき、入り口のドアが、さつと両側に開かれました。

それといっしょに、子供たちのむれが、モミの木をひっくりかえそうとするような勢いで、どつと、部屋の中へとびこんできました。おとなたちは、そのあとからゆっくりとはいってきました。

小さな子供たちは、じつとだまりこんで、立っていました。――

しかし、それもほんのちよつとの間で、すぐまた、あたりに鳴りひびくほど、うれしそうな声を出して、はしやぎました。そして、木のまわりを踊りながら、贈り物おくものを一つ、また一つと、つかみとりました。

「この子たちは、何をしようつていうんだらう？」と、モミの木は考えました。「どんなことが起るんだらう？」やがて、ろうそ

くは小さくなつて、枝のところまで燃えてきました。こうして、だんだん小さくなつてくると、順々に火が消されました。それから、子供たちは、木についているものを何でももぎ取つていいという、おゆるしをもらいました。うわあ、子供たちは、モミの木めがけて突進とっしんしてくるではありませんか。さあ、たいへん。どの枝もどの枝も、みしみしなります。もしも木のとつぺんと金の星とが、天てんじょう井いにしつかりと結びつけられてなかつたなら、モミの木は、きつと、たおされてしまったことでしょう。

子供たちは、きれいなおもちゃを持つて、踊りまわりました。もうだれひとり、木のほうなどを見るものはありません。ただ、年とつたばあやがきて、枝のあいだをのぞきこんでいました。で

もそれは、イチジクかりんごの一つぐらい、忘れて、のこつていやしないかと、ながめていたのです。

「お話！ お話！」と、子供たちは大声に言いながら、ふとつた、小がらの人を、モミの木のほうへ引っぱってきました。その人は、木のま下に腰こしをおろして、「こりやあ、緑の森の中にいるようだね」と、言いました。「これじゃ、この木が、いちばんとくをするといふものだ。だが、わたしは一つしかお話をしとあげないよ。おまえたちは、イヴェデ・アヴェエデのお話が聞きたいかね？ それとも、階段からころがり落ちたのに、王さまになつて、お姫ひめさまをもらった、クルンベ・ダウンベのお話が聞きたいかね？」

「イヴェエデ・アヴェエデ！」と、さけぶ者もあれば、「クルンベ・

「ドウンベ！」と、さげびたてる者もありました。がやがやとさわぎたてて、いやもう、まったくたいへんでした。ただ、モミの木だけは、だまりこんでいました。心の中では、「ぼくは仲間じゃないんだらうか？ 何かすることは無いんだらうか？」と、考えていました。もちろん、モミの木は仲間でした。しかも、自分のしなければならぬことは、もう、すましてしまっていたのです。

ところで、あの小がらの人は、階段からころがり落ちたのに、王さまになって、お姫さまをもらった、クルンベ・ドウンベのお話をしました。すると、子供たちは、大よろこびで手をたたいて、「もつと話して！ もつと話して！」と、さげびました。子供たちは、イヴェデ・アヴェデのお話も聞きたかったのです。でも、

このときは、クルンベ・ドウンベのお話しか聞かせてもらえませんでした。

モミの木は、じつと黙^{だま}りこんだまま、考えていました。森の中の鳥たちは、いままで一度だって、こんなお話をしてくれただけではありません。「クルンベ・ドウンベは、階段からころがり落ちたのに、お姫さまをもらったんだ。うん、うん、世の中って、そういうものなんだ」と、モミの木は考えて、このお話をした人は、あんなにいい人なんだから、きつと、これはほんとうのことなんだ、と思いこんでしまいました。「そうだ、そうだ。ぼくだって、もしかしたら、階段からころがり落ちて、お姫さまをもらうようになるかもしれないんだ！」こうして、モミの木は、つぎの日も、

ろうそくや、おもちゃや、金の紙や、果物くだものなどで、かざっても
らせるものと思つて、楽しみにしていました。

「あしたは、ぼくはふるえないぞ！」と、モミの木は心に思いま
した。「ぼくがきれいになつたところを見て、うんと楽しもう。
あしたもまた、クルンベ・ドウンベのお話を聞くんだ。それから、
イヴェデ・アヴェエデのお話も、きつと聞けるだろう」こうして、
モミの木は、一晚じゆう、じつと考えこんで立っていました。

あくる朝になると、下男と下女がはいつてきました。

「さあ、またかざりつけてくれるんだ！」と、モミの木は思いま
した。ところが、みんなは、モミの木を部屋の外へ引っぱり出
して、階段を上り、とうとう、屋根裏部屋に持つていつてしまいま

した。そして、お日さまの光もさしてこない、うすぐらいすみつこに置いていきました。「こりやあ、いつたい、どういふことなんだ？」と、モミの木は考えました。「いつたい、こんなところで、何をさせようつていうんだらう？ それに、こんなところで、何が聞かせてもらえるんだらう？」

こうして、モミの木は、かべに寄りかかつて立つたまま、いつまでもいつまでも考えつづけました。——時間はいくらでもありました。だって、そうしたまま、いくにち幾日も幾晩もすぎていったのですもの。だれも、上つてきませんでした。しかし、とうとう、だれかが上つてきました。でも、それは、大きな箱を二つ三つ、はこすみつこに置くためだったのです。おかげで、モミの木は、すつ

かりかくれてしまいました。このようすでは、モミの木のことなんか、みんなは忘れてしまったのでしよう。

「外は、いま冬なんだ」と、モミの木は考えました。「地面はかたくて、雪がつもっているもんだから、ぼくを植えることができないんだ。だから、春になるまで、ぼくをここへ置いて、守っていてくれるんだ！ それにしても、なんて考え深いんだろう！

なんて、みんな親切なんだろう！——だけど、ここがこんなに暗くて、こんなにさびしくなけりやいいんだけど。——なにしろ、小ウサギ一ぴき、いないんだからなあ！——あの森の中は、楽しかったなあ！ 雪がつもると、ウサギがとび出してきたっけ。うん、そう、そう、そしてぼくの頭の上を、とびこえていったっけ。

でもあのときは、そんなことは、ちつともうれしくなかつたんだ。そりやあそうと、この屋根裏部屋はおつそろしいほどさびしいなあ！」

そのとき、小さなハツカネズミが一ぴき、チュウ、チュウ、鳴きながら、ちよろちよろ出てきました。そのあとから、小さいのがまた一ぴき、出てきました。二ひきのハツカネズミは、モミの木えだのそばへよつて、においをかいでいましたが、やがて枝のあいだへはいりこみました。

「とつても寒いわ！」と、小さなハツカネズミたちは言いました。「でも、ここは、ほんとにいいとこね。ねえ、お年よりのモミの木さん！」

「ぼくは年よりじゃない！」と、モミの木は言いました。「ぼくなんかより、ずっと年とつたのがたくさんいるんだよ」

「あなたは、どこからきたの？」と、ハツカネズミたちがたずねました。「あなたは、どんなことを知っているの？」このハツカネズミたちは、ほんとに聞きたがりやでした。「ねえ、世の中でいちばんきれいなところのお話をしてちょうだい。あなた、そういうところへ行つたことがあるの？　こんなすてきな食べ物のあるお部屋へ行つたことはない？　チーズがたなにあつて、ハムが天井からさがつていて、あぶらろうそくの上で踊りおどがおどれて、おまけに、はいつていくときはやせていても、出てくるときはふとつている、ねえ、こんなすてきなお部屋はない？」

「そんなところは知らないね」と、モミの木は言いました。「けど、森は知ってるよ。お日さまがキラキラかがやいて、鳥が歌をうたっている森のことならね」そして、小さい時のことを、のこらず話してきかせました。小さなハツカネズミたちは、いままでにそんな話を聞いたことがなかったので、むちゅう夢中になって聞いていました。そして、「まあ、あなたは、ずいぶんいろんなことをごらんになったのね！　あなたは、なんてしあわせなんでしょう！」と、言いました。

「ぼくが？」と、モミの木は言つて、自分の話したことを考えてみました。「そうだ。あのころが、まったくのところ、ほんとに楽しい時だったんだ！」——それから、お菓子やろうそくでかぎ

つてもらった、クリスマス前夜のことを話しました。

「まあ！」と、小さなハツカネズミたちは言いました。「あなたは

は、なんてしあわせなんでしょう、お年よりのモミの木さん！」

「ぼくは、年よりじゃないつたら！」と、モミの木は言いました。

「やっとこの冬、森から来たばかりなんだよ。ぼくは、いま、

いちばん元気のいい年ごろなのさ。ただ、すこし大きくなりすぎ

たけどね」

「ほんとに、お話がお上^{じょうず}手だこと！」と、ハツカネズミたちは

言いました。つぎの晩には、ハツカネズミたちは、ほかに四ひき

の仲間を連れて、モミの木の話を聞きにやってきました。モミの

木は話をすればするほど、だんだん、なにもかも、はつきりと思

い出してくるのでした。そして、心の中でこう思いました。「それにしても、あのころは、まったく楽しい時だった。だけど、ああいう時が、また来るかもしれない。また来るかもしれないんだ！ クルンベ・ドウンベは、階段からころがり落ちたつて、お姫さまをもらったじゃないか。ぼくだつて、もしかしたら、お姫さまをもらえるかもしれないんだ」

そうして、モミの木は、あの森の中に生はえていた、小さな、かわいらしいシラカバの木を思い出すのでした。モミの木にとつては、そのシラカバの木は、ほんとうに美しいお姫さまのようだったのです。

「クルンベ・ドウンベっていうのは、だれ？」と、小さなハツカ

ネズミたちがたずねました。そこで、モミの木は、その話をすっかり聞かせてやりました。モミの木は、一つ一つの言葉まで思い出すことができたのです。それを聞くと、小さなハツカネズミたちは、うれしくてたまらなくなつて、もうすこしで、モミの木のてっぺんまでとび上がるところでした。

そのつぎの晩になると、もつともつとたくさんのハツカネズミたちがきました。そして日曜日には、二ひきのドブネズミまでもやってきました。ところが、そんな話はおもしろくなんかありません、と、ドブネズミたちは言うのです。そうすると、小さなハツカネズミたちも悲しくなりました。もう、前のようにおもしろいとは、思われなくなつたのです。

「おまえさんは、その話がたった一つしかできないのかね？」と、ドブネズミたちがたずねました。

「これ一つだけ！」と、モミの木は答えました。「その話は、ぼくがいちばんしあわせだった晩に聞いたんだよ。でもそのころは、ぼくがどんなにしあわせかってことを、思ってもみなかったんだ」

「じつにばかばかしい話だ！ おまえさんは、ベーコンとか、あぶらろうそくとかいうようなものの話は、なんにも知らないのかね？ 食物部屋の話なんかも知らないのかい？」

「知らない」と、モミの木は言いました。

「ふん、じゃあ、ごめんよ」ドブネズミたちは、こう言うと、さつさと、自分たちの仲間のところへ帰ってしまいました。

そのうちに、小さなハツカネズミたちも、行ってしまったまま、とうとう、こなくなつてしまいました。モミの木はため息をついて、言いました。

「あのすばしっこい小さなハツカネズミたちが、ぼくのまわりにすわつて、ぼくの話を聞いてくれたときは、ほんとに楽しかったなあ！ でも、それも、もうおしまいさ。——だけど、今度、ここから連れていってもらったら、忘れないで、楽しくなるようにしましょう」

しかし、いつ、そうなつたでしょうか？——そうです。ある朝のことでした。人々が上つてきて、屋根裏部屋の中をかきまわしはじめました。とうとう箱が動かされて、モミの木が引っぱり出

されました。モミの木は、ちよつと荒あらつぽく床ゆかに投げだされましたが、すぐに下男が、お日さまの照あつている、階段の方へ引きずつていきました。

「さあ、またぼくの人生がはじまるんだ！」と、モミの木は思いました。モミの木は、すがすがしい空気と、お日さまの光をからだに感じました。——このときは、もう、おもての中庭にいたのです。なにもかも、すっかり變かつていました。モミの木は、自身をながめることを、まるで忘れてしまつて、思わず、まわりのいろいろなものに見とれてしまいました。

この中庭は花はな園ぞののとなりになりましたが、見れば花園では、いろいろな花が今をさかりと、咲さきみだれていました。バラの花

は低い垣かきの上にたれ下がって、すがすがしい、よいにおいを放つていました。ボダイジュの花も、いま、まつさかりでした。ツバメがあたりを飛びまわって、「ピイチク！ ピイチク！ あたしおっとの夫がきましたわ！」と、うたっていました。けれども、それは、モミの木のことではありませんでした。

「さあ、これから生きるんだ！」と、モミの木は、うれしそうに大きな声を出しました。そして、枝をうんとひろげてみました。ところが、なんとということでしょう。枝はみんな、かれてしまつて、黄色くなつていのです。モミの木は、雑草やイラクサの生えている、すみっこのほうに横になつていました。金の紙でつくつた星が、まだてっぺんについていて、明るいお日さまの光を受

けて、キラキラかがやいていました。

中庭では、元気そうな子供たちが二、三人、あそんでいました。それは、クリスマスのときに、モミの木のまわりを踊って、あんなによろこんでいた、子供たちだったのです。その中のいちばん小さな子が走ってきて、金の星をむしり取ってしまいました。

「ねえ、こんなきたない、古ぼけたクリスマスツリーに、まだこんなものがついてたよ！」こう言いながら、その子は、枝をふみつけました。靴くつの下で、枝がポキポキ鳴りました。

モミの木は、花園に咲きみだれている美しい花、いきいきとした花をながめました。それから、自分自身の姿を振りかえってみて、いつそのこと、あの屋根裏部屋の、うす暗いすみっこにいた

ほうがましだった、と思いました。そして、森の中ですごした若かったころのこと、楽しかったクリスマス前夜のこと、クルンベ・ドウンベのお話を、あんなによろこんで聞いていた、小さなハツカネズミたちのことなどを、つぎつぎに思い出すのでした。

「おしまいだ、おしまいだ！」と、かわいそうなモミの木は、言いました。「楽しめるときに、楽しんでおけばよかったなあ！

おしまいだ、おしまいだ！」

そのとき、下男がやってきて、モミの木を、小さく切りわってしまいました。こうして、まきのたばができあがりました。やがて、モミの木は、お酒をつくる大きなおかまの下で、まっかに燃え上がりました。モミの木は、深く深くため息をつきました。そ

して、ため息をつくたびに、なにか、パン、パン、と、小さくはじけるような音がしました。それを聞きつけると、あそんでいた子供たちがかけこんできて、火の前にすわりました。そして、中をのぞいて、「ピッフ！ パッフ！」と、大声にさげびました。

モミの木は、深いため息についてパチパチ音をたてるたびに、森の中の夏の日のことや、キラキラとお星さまのかがやく冬の夜のことを、思い出すのでした。それから、クリスマス前夜のことを、また人から聞かせてもらって、自分も話すことのできた、たった一つのお話、クルンベ・ドウンベのことを、思い浮うかべるのでした。——こうしているうちに、とうとう、モミの木は、燃えきってしまった。

それからまた、男の子たちは、中庭であそびました。見ると、いちばん小さな男の子は、胸に金の星をつけていました。それは、モミの木がいちばんしあわせだった晩に、つけてもらったものです。でも、今は、それもおしまいです。そして、モミの木も、おしまいになりました。それから、このお話もおしまいです。みんなおしまい、おしまい。お話というものは、みんな、こんなふうにおしまいになるものですよ。

青空文庫情報

底本：「人魚の姫 アンデルセン童話集※」
「#ローマ数字」、1-1
3-21」新潮文庫、新潮社

1967（昭和42）年12月10日発行

1989（平成元）年11月15日34刷改版

2011（平成23）年9月5日48刷

入力：チエコ

校正：木下聡

2019年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

モミの木

ハンス・クリスチャン・アンデルセン Hans Christian Andersen

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 矢崎源九郎訳
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>